

ベルギーの養蜂

O. van Laere and
E. Bruneau

ベルギーを語るなら、もちろん、ヨーロッパ連合EUの本部の置かれているブリュッセルや、ブルッゲ、アントワープ、それにその他の、何かしら注目すべき建築遺産の残る町々について語らねばならない。しかし、この国はまた、皆様がこの国を訪れ、養蜂場を見ていただくのを楽しみにしている10000名もの熱心な養蜂家がいる国でもある。

地理と人口

ベルギーは北半球、北緯51°の温帯地域にあり、ヨーロッパの中西部に位置している(図1)。北はオランダに接し、東にドイツとルクセンブルグ、南にフランス、西側は北海である。面積30000km²の国土に1000万の人口を擁し、世界で最も人口密度の高い国の一つである。ベルギーは三つの言語圏に分かれており、63%がオランダ語(北部: フランドル)を話し、36%がフランス語(南部: ワロン州)を、残り1%がドイツ語(東部州)を母言語とする。首都、ブリュッセルは両公用語(フランス語とオランダ語)の通用地域である。

気候は温暖で、年間約170日の雨天はほぼ4月から9月に集中している。

植生—農業と養蜂植物—

沿岸と北西部は低地で、一方、南東部は丘陵地帯となっている。北海沿岸の広大な砂丘に続いて、その内陸の地勢は、ローム層を砂土壌が覆っている地域から重い粘土までの様々な土壌が分布する。これに続いてさらに内陸側には、南東部では石灰質土壌、東部では表面泥炭ローム層といった特殊な土壌が分布する。もちろん、これらの土壌にはそれぞれ異なる植生が対応し、農業の形態も地域で異なっている。

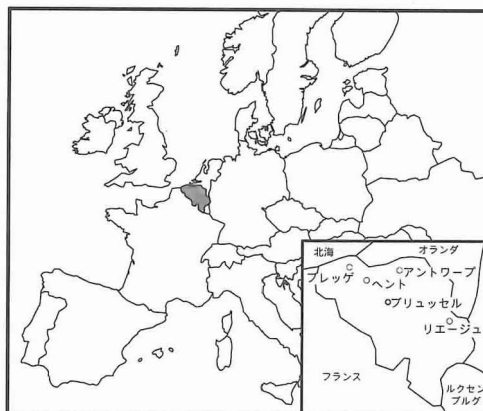


図1 ベルギーの位置

農業は、全国的に穀物やテンサイの栽培、放牧や牧草地などが中心である。林業は主に国の南部地区で営まれ、この地域は広葉樹とマツ類(軽い砂地)の森林地帯として重要で、また果樹についても重要な地域がある。

主な蜜源植物

ベルギーのハチミツはおおよそ80種の植物を蜜源としている。春には、ヤナギ、クローバー、果樹、アブラナ科、タンポポ、サンザシが主要蜜源で、夏には、ニセアカシア、ライム、アマクリ、ブラックベリー、ブラックニセアカシア、雑草やヒースの類がもっとも重要である。単一花のハチミツや甘露蜜はまれである。

現代農業経営の最近の傾向として農地の一定の割合を休耕地としておくことが多い。多くの場合に、そこには、土壌の被覆、土壌改良を目的としたチュービンガー混合種子を蒔いたりすることが多いが、これは同時に蜜源としても十分な価値を持っている。

ベルギー産のハチミツは市場のほんの数%を占めるのみで、消費されるハチミツの80%以上が輸入である。

花粉媒介における養蜂の役割

—殺虫剤の影響—

他のどこでも同じように、ベルギーでも養蜂は生物多様性の保全にとって不可欠な要素となっている。膨大な非栽培植物の種の維持は国内にまんべんなく散らばっている十分な蜂群の存在でのみ保証されている。野性の蜂群は、天候の不安定性、不十分な営巣場所、比較的長い冬

が原因で実質的に存続できないので、多くの原野や森林の植物の生存は養蜂家の存在にかかっている。ベルギーの人口密度が高いことが、この点では飼育されている蜂群を十分な密度に保たせており、これによって生物的多様性の自然なバランスが維持されている。

問題があることも否定できない。第二次世界大戦以降、除草剤の広範囲にわたる利用が多く、野生の蜜源植物の減少を招いている。開花期にいい加減に用いられる殺虫剤によってミツバチが死亡することも頻繁に起きている。近年、除草剤や殺虫剤の利用に関して注目すべき改善をみることができた。80年代後半から制定されてきた新しい法律により、道路沿いで除草剤の利用が禁止され、草本の蜜源植物がかなり増えた。殺虫剤の使用に関する最近の法規は、ミツバチに毒性のある薬剤を、ミツバチが訪花するような植物に散布することを例外なく不許可とし、また一方で、殺虫剤の大量販売・消費の認可申請の手続きが生態毒物委員会で厳しく審査され制限されるようになってきた。

経済的見地からは、ベルギーの養蜂は東北地域の広い範囲で営まれる果樹生産における花粉媒介にとって必要不可欠な要素となる。さらに、レッドクローバーやホワイトクローバーのような多くの農作物や園芸作物がミツバチによる花粉媒介に依存している。現在、ナタネは栽培が小規模化している。

花粉媒介が最も重要なのは施設内栽培の作物である。ベルギーでは施設園芸が広大な面積を占めている。これまで施設園芸は夏期に限定されていたが、近年では通年栽培へとほとんどが転換し、たとえば、ストロベリー (*Fragaria x ananassa*)、ラズベリー (*Rubus idaeus*) やブルーベリー (*Vaccinium corymbosum*) などは周知のところである。温室のトマトの花粉媒介にはマルハナバチが多用されている。送粉昆虫を守る目的で、温室内の作物を加害する害虫やダニの防除方法としての天敵の導入が一般化するようになった。

ベルギーの養蜂家

ほとんどのベルギーの養蜂家は、別に仕事を

持っているアマチュア養蜂家である。彼らの大多数は退職者で、また、副業としての養蜂も続けられている。ごく一部の養蜂器材や生産物の販売を主業としている養蜂家がセミプロ養蜂家といえるかもしれない。

養蜂家の所有蜂群数は平均10群で、蜂群当たりのハチミツ生産量は大きなばらつきがあり、4~5kgから50kgを超えるものまでさまざま、平均11kg/蜂群である。養蜂協会のこれまでの記録に基づけば、養蜂は主に男性によって行なわれており、女性は養蜂家の10%以下にすぎない。しかし、その数は確実に増加している。

ベルギーの養蜂家の平均年齢は50~55歳であるが、養蜂の始めた年齢は30~40歳で、40年前に比べて高齢化している。

蜂の種類、蜂具、飼育法

もともとの土着のメリフェラ種は純系としては滅多に見つからない。1950年代にはイタリアン種の女王蜂の輸入が盛んであったが、これも現在ではほとんど姿を見ない。代わって北部のカーニオラン種が導入されている。ここ10年はバックファスト系統が興味を集めている。アメリカ産の女王蜂は現在では低価格でシーズン初期に輸入されている。三代雑種はまれに輸入されている。

1970年代の初期にメレルベクの農業研究センターで女王蜂の人工授精の研修が始められた。その5年余り後になって、人工授精は実際に養蜂のために用いられ、さまざまな成果をもたらしてきた。現在は数人のセミプロ養蜂家が日常的に人工授精を行い、作出した女王蜂を大量に配分している状況である。こうした人工授精はいずれも合理的で科学的な系統選抜計画の一部として行われる。いくつかのセンターでは、世代ごとにひととおりの選択基準について試験をしながら各品種の系統維持を行っている。ベルギーとオランダの研究グループは共同で研究を行っており、実用に結びつく選抜成果を上げている。

少数の養蜂家は果樹、ナタネやライムなどを求めて移動養蜂を行っている。ベルギーの養蜂

場の多くは囲いや屋根があるが、完全な建物になっていることはまれである。

飼養技術

ベルギーの養蜂は周辺諸国の養蜂の影響を大きく受けており、蜂具や管理技術は地域ごとに特徴がある。ベルギーでもっともよく用いられている巣箱は通常の上蓋式である。後側が開閉できる巣箱はまれで、局所的に普及したものである。主な巣箱の型式としてはデダント（南部に多い）、シンプレックス、WBC、およびポワルノであるが、その他の巣箱も特に地域によらずあちこちに分布している。これ以外にも、古典的な養蜂器具が用いられている。ほとんどの場合、養蜂家の持っている分離器は3~4枚の巣板用で、放射状に何枚もの巣板が入るような大型の分離器はほとんど見られない。

個々の（アマチュア）養蜂家は、部分的には手引きに習い、残りは自分の経験を下敷きに、めいめいそれぞれに異なる技術を有している。ここ数年、蜂具や技術における合理化が進んでいるようだが、これは蜂群の自然な営みを保護しているという考え方に基づいている。

フラマン人の居住地域については、メルレバク（ヘントの南6km）の農業研究センターの養蜂担当部処である作物保護課について触れなければならない。その活動は、病理学、農薬残留分析、作物の花粉媒介、女王蜂の人工授精と多岐にわたっている。フランス語圏では、農業研究情報センター（CRJI）がハチミツ分析や各種の研修コースを開設し、雑誌“Abeilles et Cie”を刊行、ハチミツや花粉媒介に関する研究を行っている。

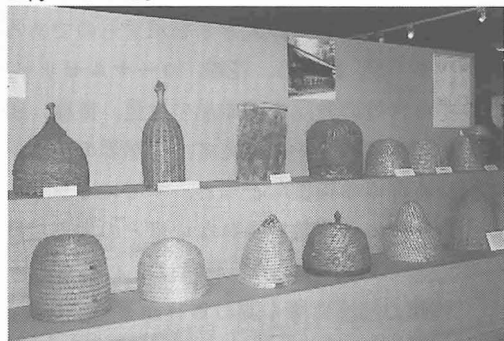


図2 アピモンディア博物館に陳列されている各種のスケップ巣箱

養蜂協会

ベルギーの養蜂家のほとんどが何らかの養蜂協会の会員である。これらの地域の協会は会議や研修旅行や、養蜂の研修会まで開催しており、これによって地域の養蜂の振興を行っている。こうした協会はいくつかの連合会を組織しており、それぞれ技術雑誌を刊行している。フランス語では“La Belgique Apicole”と“Journal of the KVIB”，オランダ語では“Journal of the Union Royale des Ruchers Wallons”と“The Flemish Beekeeper”が刊行されている。国内では現在2つの連合会が法人として登録されている。近い将来、変革が見られる模様である。

（翻訳 江澤 真）

編集部より

本記事は、「ミツバチ科学」の読者の方々に、今年9月1日から6日にかけてベルギーのアントワープで開催される第35回国際養蜂会議に参加していただけよう、大会事務局から掲載を依頼されたものである。

国際養蜂協会連合 APIMONDIA は今年100周年を迎え、今大会は会議、展示会ともに力の入ったものになるようである。会議の概要については、下記の大会事務局に直接お問い合わせいただくか、ツアーを企画している（社）日本養蜂はちみつ協会またはアジア養蜂研究協会にお問い合わせ願いたい。

第35回国際養蜂大会事務局

Prof. O. Van Laere

Dekokerlaan 13, B-9940 Evergem, Belgium

Tel & Fax: +32-9-253-91-63

Email: vanlaere@club.innet.be



図3 100周年記念のアピモンディア大会ロゴ